

情報源： **Japan Business Press**

2012.03.22 鳥賀陽弘道氏による双葉町の井戸川克隆町長へのインタビュー

「双葉町民はあり合わせの手段で脱出」より **3月12日**に関する部分抜粋

鉤括弧（「 」）は双葉町の井戸川町長、――は鳥賀陽氏

□**12日 05:44** 政府 **1F**の半径**10km**圏内に避難指示

「あの時点では、どこまで避難していいのか分からなかったのです。(略) 『とにかく (**10** キロ以遠で道路が通じている) 川俣町に逃げてくれ』と防災無線で叫び続けたのです」

□**12日 09:15** 1号機のベント準備、難航

10:40 1号機のベント開始。**1F**敷地内で放射線量上昇を確認

「一般町民の避難が完了するのは、**12日午後12時半**ごろです」

「ベントするなんて、まったく予想できないし、もちろん知りませんでした。東京電力の社員は**2**人が役場に詰めていたのに、ベントするなんてまったく何も言わなかった。すでにメルトダウンしていたとも言わなかった。今思うと顔が真っ青だったから、何か知っていたのかもしれませんが。覚えているのですが、ちょうどベントしたころ、役場にあったガイガーカウンターの針が振り切れました」

―― どちらの方向に避難せよとか、国や県から指示はありましたか。

「ありません」

―― **SPEEDI**のデータは流れてきませんでしたか。

「**SPEEDI**? まだ一度も見たこと、ない…」

―― どうやって逃げる方向を決めたのですか。

「役場の前の旗を見ていました。**11日**、この季節では普通の西風だったのに、**12日**は朝は東風、午後**1**時には南東、夕方には南西とぐるりと風向きが変わった」

一般町民の避難が終わった**3月12日**午後、井戸川町長は職員を連れて町内にある農協系の病院「双葉厚生病院」に向かった。入院患者や高齢者をバスに乗せて避難先に移送するためだ。**1**台目のバスを送り出し、**2**台目に入院患者を乗せていたときだ。

□**12日 15:36** 1号機建屋で爆発音とともに白煙・水素爆発

「『ドン』と低い音がしたんです。『ドカーン』とかいうテレビで聞くような爆発音ではなく、低くて鈍いドン、という音だった。『ああ、やってしまった』。その瞬間、何が起きたか分かりました」

それから**5**分ほどして、何かモノが降ってきた。大きなものは**5**センチ角くらいあった。ふわふわと、ボタン雪のように落ちてきた。建物で使う断熱材のように見えた。「異様な光景だった」と井戸川町長は言う。原発では、高温の蒸気や冷却水が流れる多数の配管に断熱材を巻く。それが水素爆発で吹き飛び、風に運ばれて、約**2**キロのところにある病院に降ってきたのだ。当然、高濃度の放射能を帯びていただろう。町長の話を聞く限り、それはまさに「放射性降下物」つまり「死の灰」そのものに思える。

—— それは危険なものだという認識はありましたか。

「もちろん」

—— どう思いましたか。

「もう終わりだ、と思いました」

—— どういう意味ですか。

「死を覚悟したんです」

町長はそこでしばらく沈黙した。私は息を呑んだまま町長の顔を見つめた。

「今でもそうです」

でも、と町長は言葉を継いだ。

「あそこには若い病院の職員もいた。看護師さんもドクターもいた。まだ 300 人くらいがいたんです」

—— 落ちてきた死の灰をどうしたのですか。

「ホコリか雪のように、手で払うしかありませんでした」

偶然、町長たちが病院から退避した翌日の 13 日、ジャーナリストの広河隆一さんたちが双葉厚生病院前に到達した。その様子を撮影した動画が YouTube に残っている。それを見ると、病院の玄関前にはストレッチャーや車椅子、寝台がそのまま放置され、大混乱の中で避難した様子が窺える。

—— その後、健康に異常はありませんか。

「鼻血が出ます。強くかむと、すぐに鼻血が出て止まらないんです。こんなことは以前はなかった。それから、下半身や胸の体毛が抜けてつるつるになってしまった。銭湯に行って体を洗ったら、隣に座った人が『町長、なんでそんなにつるつるなんだ』って言うから気がついた。肌着と肌の間毛がないと、なんだか気持ち悪い」

.....

■ 「私たちは、歴史を、将来を失った」

「国は、私たちが国民だと思っているのだろうか」

井戸川町長は腕組みをして、頭を振った。

「まるで明治維新の未完成の部分が今日まだ残っている、みたいな話じゃないですか」

双葉町は、長年、原発が落とす固定資産税や交付金に依存してきた財政が災いして破綻、町予算が組めない事態に追い詰められた。福島第 1 原発に 7、8 号機を増設してほしい、という要望書を出したこともある。双葉町の予算規模（一般会計）は 42 億円ほどだ。その町に、固定資産税だけで年 18 億円、電源立地地域対策交付金が 19 億円入る。それは町長の言葉を借りるなら「一息つける」金額だった。

「でも」

井戸川町長は言った。

「原発事故が起きて、こんなこと（町全体が移転）になってしまって、私たちは歴史を失った。そして将来も失った。それは計り知れない大きな価値を失うということなんです。東電の賠償なんてとても追いつかない、大きな損失なんです」

.....

□11日 21:30頃 双葉署員が派遣された双葉町には「原発が危ない」との情報が入ってきていた

「圧力容器の圧力が高くなり通常の倍以上になっている」
署員は双葉町役場から情報を随時、署に伝えていた。

□12日 05:44 避難指示区域が第1原発の半径3キロ圏から10キロ圏に拡大された

09:00頃

双葉町役場は避難住民であふれていた。「どこに避難すればいいんだ」。住民は口々に署員に尋ねてきたが、どう答えていいのかわからなかった。
双葉署は管内の住民がどのくらい残っているか確認をしていた。双葉町には車で移動する人や歩いている人がいた。署員が「早く西へ、山側へ逃げて」と言うと、1人の女性が「車がないんです」と訴えた。署員は避難する住民の車を止め、「この女性を乗せてください」と頭を下げた。避難場所だった双葉北小でも避難を呼び掛けた。

09:00過ぎ

双葉町に東電社員から「1号機でベントをする」との情報が伝わった。午前10時すぎにベントへの作業が始まった。防災無線とスピーカーで「早く逃げて」という内容のアナウンスが響いた。

昼頃 県警は双葉署浪江分庁舎に「双葉厚生病院の入院患者を至急避難させよ」と指示を出した

双葉町の双葉厚生病院は第1原発から3キロほどの距離にある。双葉署浪江分庁舎の地域交通課地域二係長の横山昭幸(49)は1人車に乗り込み、病院に向かった。災害警備本部の指示は、病院近くのヘリポートと搬送車両の確保だった。

医師に患者らを避難させることを説明したが「無理に運べば死んでしまう」と断られた。説得を重ね、最終的に病院側は患者らの避難を了承した。

ヘリポートは病院から1キロ離れた双葉高にすることにした。横山の母校だった。双葉高に車を走らせ、着陸できることを確認し、災害警備本部に無線で伝えた。

病院に戻る途中、横山は双葉町役場に立ち寄った。自衛隊が待機していた。責任者に「(双葉厚生病院からの)救助を手伝ってほしい。原発の近くで至急対応しなければならぬ」と訴え、了解を取り付けた。

町長の井戸川克隆に「自衛隊の協力によって搬送手段が確保できた。病院も了承した」と説明した。井戸川も応じた。「分かった。避難させよう」

自衛隊を誘導し双葉厚生病院に戻った。署員も数人が応援に来た。病院にはたくさんの患者がいた。寝たきりの重症者だった。自衛隊の車は病院と双葉高を何度も往復した。「自衛隊がいなければ搬送できなかった」

15:36 第1原発1号機水素爆発

患者の搬送が続く双葉厚生病院。双葉署係長の横山昭幸は「バリバリ」という音を聞いた。雷が落ちたと思った。どこから聞こえたかわからなかったが、空を見ると青空だった。署員の1人が「原発が爆発した」と言った。場所を移って原発を見た。灰色の煙が風で流れていくのが見えた。無線を取った。

15:37 横山は無線に向かって叫んだ。「至急、至急。至急、至急。至急、至急」

緊張は頂点に達していた。災害警備本部に「爆発したような音がした」と一報を入れた。

白っぽい綿ぼこりのような物が空から降ってきた。こぶし大の大きさで、ふわふわしていた。断熱材のような物だった。「終わったな。死ぬかな」と思った。

だが、患者の避難は終わっていなかった。任務の途中だと言い聞かせ、患者を車両に急いで乗せ続けた。施設から出ていない人は屋内に退避させた。停電で手動になっていた自動ドアを閉め、ガラス越しに「後でまた来るから」と約束した。「本当に心苦しかった」

至急報は、他の警察官が無線のやりとりをしても会話をやめて聞く。周辺の病院や老人介護施設、知的介護施設などでは、双葉署員や機動隊、特別機動パトロール隊が患者搬送に携わっていた。ほとんどの警察官が横山の一報を聞いていた。

第1原発爆発の状況が無線で伝えられていたころ、双葉高には患者と関連施設の入所者が200人ほどいた。全員が寝たきりや車いす利用者らだった。浪江町にいた特別機動パトロール隊長の佐藤実(52)は町内で住民の避難誘導をしていた県警機動隊員とバス1台を従え、午後5時すぎ双葉高に到着した。双葉高では患者が搬送を待っていた。自衛隊ヘリが二本松方面と往復する予定だったが、12日夜から13日昼ごろに1、2回来ただけだった。「待てどもヘリは来なかった」。佐藤は災害警備本部を通じて県にヘリの出動を要請した。13日夕、機動隊のバスで県相双保健福祉事務所との間を往復し、全員を搬送した。自衛隊員が1人残っていたが、一緒に行動した。

15:40頃 県警の災害警備本部は原発異常事態の一報後、爆発情報が相次いだ

県警は県の災害対策本部、オフサイトセンター、東電福島事務所に「第1原発から白煙との情報が入った。情報が入っているか」と確認を求めたが、「把握していない」との答えが返ってきた。

15:41 緊急特別派遣で上空にいた神奈川県警のヘリから「第1原発から爆発音が聞こえた。灰色の煙が見える。200メートルぐらい上がっている」と無線連絡が入った。

15:43 本部長の松本光弘(50)が警察庁に連絡するよう指示。「官邸を通じて情報の確認をしてもらいたい」。官邸には危機管理センターがあった。各局長クラスや経産省、保安院などが集まり、情報が集約される。だが官邸からは「把握していない」という答えだった。

15:45頃 災害警備本部は横山昭幸に再度確認する。「状況をもう1度送れ」。横山は答えた。「内容は先ほどの通り。爆発音がして白い煙が上がり、白い綿ぼこりのような物が降ってきた」

15:47 第1原発の状況を県警ヘリ「あづま」が伝えてきた。航空隊長の横山安春らは、やや黒みがかかった灰色の煙が北西方向に流れているのを肉眼で確認した。原発に近づくと、建屋の骨組みだけが見えた。

独自に判断、避難要請

15:50 県警は周辺住民の避難を要請した。依然、政府から原発爆発の公式発表はなかった

本部長の松本は(1)署員が白煙を目撃(2)神奈川県警も白煙を目撃(3)県警ヘリが壊れた第1原発の建屋を目撃 — との県警が収集した情報から、公表を決断した。

福島署にいた県庁社会記者クラブの加盟各社に総務課広報官の金子堅一(59)が「県警の責任において、第1原発の周辺住民が避難してくれるよう報道を要請する」と伝えた。いなかった社には電話で要請した。

16:00 テレビ局がテロップで「県警からの指示で福島第1原発周辺の住民はすぐに避難」と流す。

別の局は第1原発が白煙を上げている映像を流した※。

※15:40 福島中央テレビ 1号機爆発映像をローカル放送

17:45 ようやく官房長官の枝野幸男が「第1原発で何らかの爆発的事象があった」と発表した。